

# 在米日本人「移民地文芸」覚書（3）

## 「かへらぬふるさと」

### ——下山逸蒼の自由律俳句

桑井輝子

#### はじめに

下山逸蒼（英太郎1879-1935）は、在米日本人移民の文人のなかでは例外的に日本でもその活動が注目され、その名が記憶されてきた俳人である。旧士族の若者が立身出世を夢見て1903年に渡米したものの、季節労働者として各地を放浪し、その間に農園主の妻との恋に破れ、骨髄炎で左足の自由を失い、長い闘病生活を経て、霧の街サンフランシスコで死去した。こうした日々の一瞬一瞬を切り取り、自由律俳句に詠みこんだ。遺句は3万点に達するという。このような経歴を見るだけでも、その人となり、その作品に興味を湧く。

彼の名が記憶されたのは、刻々の想いと生活の細部を日記にしたためたかのような句が、日米の『層雲』同人に高く評価されたからであろう。戦後の1954年に、同郷で同人の小林不未鳴によって、『下山逸蒼の生涯と其の芸術』が層雲社から出版された。奥付をみると編集者下山四郎となっている。実弟である。渡米前の生活を知る実弟からの情報、渡米後の逸蒼やその友人からの書簡など、親族や友人知己からの提供がなければ入手し得ない資料が駆使されている。評伝ではあるが、自由律俳句だけでなく、短歌や童話などの作品も幅広く収録されており、年表も付されている。逸蒼の活動全般や思想を知る手がかりとなる。その後の研究がこの評伝を出発点にしているもの充分うなずける。

この評伝はおそらくは一部の自由律俳句の同人や下山の関係者にのみに知られたものであったのであろう。下山が日本の移民研究者に知られるようになったのは、野本一平「放浪の日系俳人 下山逸蒼」<sup>1</sup>による。野本は開教使としてまた「移民地」の文人として、下山逸蒼を知る人々の知己を得、下山に対する老一世たちの熱情と敬意を肌で感じた。今も折に触れて、下山に関するコラムを日本語新聞に寄稿している。<sup>2</sup> 中郷美美子は「日系一世たちの自己表現」のなかで下山を取り上げ、アジア系アメリカ文学の伝統のなかに下山を位置づけようとしている。<sup>3</sup> 近年では、出身地盛岡市のウェブページ「もりおかの先人たち」で紹介されており、また直木賞候補作家によって小説の題材に取り上げられるようになった。<sup>4</sup>

本稿は新たな資料に基づいて下山を論じるものではない。彼の生涯に関しては小林に依拠している。彼の人生と作品を紹介し、あわせて「移民地文芸」の文脈のなかでその意味を考察するものである。作品は、『下山英太郎句集』、『砂漠の旅より』、『霧笛』、『海隔て』から採録した。

## 略歴

下山英太郎は1879年に旧盛岡藩士、友一郎、リヨの長男として生まれた。一家は盛岡藩のなかでは名家といわれたが、維新後の混乱と父の早世で没落した。英太郎は高等小学校卒業後給仕として県庁に勤務し、やがて測量技師となる。背は低かったが、軟弱なタイプではなかった。柔道と剣道で鍛えた体は頑健で、酒もよく飲んだ。その一方で、本を良く読み、漢学を学び、川柳、都々逸、狂歌を楽しみ、同人誌まで発行していた。俳句では1902年ごろ「一草集」という句集を纏めている。<sup>5</sup> また、政治に関心をもち、国粹的な結社一志会に所属し、将来は代議士になる夢も語っていた。文武両道の青年であった。英太郎は結婚もしたが、生活に追われて老いて行くだけの、先の見えた人生に嫌気がさし、妻を離縁し、アメリカに渡った。一志社の友人から渡米費用が送られてきたことが渡米の誘因であろう。十年は辛抱して、やがては代議士になると言い残して家を出たという。没落した家を再興し、立身出世する糸口をアメリカに求めたのである。語学研究という名目の渡米であった。[小林1-10]

1903年、英太郎はサンフランシスコに上陸した。当時の渡米青年らと同様、皿洗いから農園労働まで、今でいうところの3K労働をなんでもこなしたのであろう。やがて月5ドル（当時の為替交換レートで10円余）くらいずつ送金してくれたという [小林11]。毎月の送金5ドルというのは、当時の移民労働者の生活を考えると、破格の送金額である。激しい労働と厳しい節約の毎日であったはずである。

渡米後5年、弟への教育費の送金と借金返済が一段落するころ、小林によれば、代議士を夢見ていた英太郎の心境に変化が起きたという [小林14]。一口に移民といっても、アメリカの日本人移民労働者には、農漁村出身の低学歴肉体労働者と、翁久允や直原敏平のような、日本ではインテリ層に属しアメリカに勉学の機会を求めた青年らとがいた。後者も、スクールボーイなど家内労働で生計を維持しながら勉学の道をめざしたが、結局は金になる鉄道や農園働きに従事した。かれらは一般の肉体労働者の、飲む打つ買う、といった荒くれた生活にはなじめなかった。とはいえ、労働キャンプでは仲間として生活を共にしなければならない。そのような生活から逃れるために、1909年ころから英太郎は句作にのめり込んでいったと、小林はみなしている。1911年に、萩原井泉水が自由律俳句『層雲』を創刊すると同時に同人となった。作風は1910年と11年とでは大きく異なると小林はいう [小林22]。

1913年には直原敏平ら同好の士を集めて、句会を開き、その年の夏には紙燭会と名づけた。紙燭会は翌年11月からレモン詩社となり、のちのアゴスト社に連なる。『在米日本人史』は「南加の直原としへーと北加の下山逸蒼」を「最も特記されるべき新俳句の功労者」と呼んだ。<sup>6</sup> 英太郎は自ら句作するとともに、指導者的立場にたっていた。1914年には『逸蒼句集』<sup>7</sup> 1917年には『下山英太郎句集』を上梓した。敏平が悲壮な覚悟で俳三昧の生活に入ったのとは対照的に、英太郎はなんの苦もなく俳句を量産しているかのようにみえる。

『下山英太郎句集』

俳句とは花鳥風月の自然を詠みその感情表現は抑制的・象徴的である、という先入観を逸蒼は打ち砕く。『下山英太郎句集』および同時代のレモン詩社等の新聞切り抜き<sup>8</sup>には恋の句が並び、その多さと熱情に圧倒される。小林が「幻の女」と呼んだ相手は、同人の一人で、初歩から句作の手ほどきをした、いわば弟子である。小林によれば年上で数人の子持ちであったという。<sup>9</sup> 相手は農園主の妻、逸蒼はおそらくはそこで働く季節労働者であった。男女比率が極端にアンバランスな移民地では、男女関係のもつれや不倫、人妻の駆け落ち事件は決して珍しいことではなかった。「文化」から切り離されたような移民地において、琴をたしなみ新聞にコラムを書くようなインテリの女性と、和漢の教養にすぐれた男性が、俳句という共通の趣味から、労使関係、師弟関係を越えて惹かれたとしても不思議ではない。

逸蒼は妻を捨てて渡米した。決して世間知らずの純情な文学青年であったわけではないが、恋には理性も経験も役立たなかった。その感情を率直に、大胆に句に詠んだ。

君が琴唄の、灯に堪はず壁へ眼をそらす [英太郎句集20]

農園主の家であろう。家人も友人も集まるなかで、琴の調べに忍ぶ恋が明るみにでてしまう。明るい灯を避けて、想いを壁に凝視する。が、相思相愛の想いは壁を越えてしまった。

悲しきいのちを、ちぎり合ふ唇のをのき燃ゆる [英太郎句集19]

霧に悲しく心とけ二人添ひ行けり [英太郎句集20]

雲れんれんと別れしがふたつとも消えたり [英太郎句集22]

ひとつぼし、ひとつぼし、われらの愛のひめごとぼかす [英太郎句集23]

君をかかえしたまゆらの鏡の影よ [英太郎句集26]

不倫だという後ろめたさや罪の意識はこれらの句からは感じられない。忍ぶ恋の秘め事は熱情をかき立てる舞台装置にしかすぎない。

花野の屋の稲妻に君の幻ちぎるる [英太郎句集8]

読むうち真赤に咲く花の幻に口づけぬ [英太郎句集14]

君が眸もいま、この月にそそぎうるめるよ [英太郎句集21]

君住む空に明け句ふ月よすがれゆく [英太郎句集25]

レモン摘みつつ君おもひつつ仰げば雲行く [英太郎句集26]

この大雨に君も覚め居らむかと灯を見入る [英太郎句集27]

ただひたすら、寝ても覚めても恋人を想う。一途な想いを句のなかに解き放っている。過去も未来もなく、今があるだけである。

独身の男はそれでよいだろう。しかし、女性の方には子どももいる。感情の揺れは大きい。

落葉さまざむ、泣き濡るる臉を吸ひつつ [英太郎句集29]

みごもる人の有明の灯さへ消えんかと [英太郎句集33]

いたまし、いとし、眼とづればいとど瘦せし影 [英太郎句集33]

女性の方は、何もかもうち捨てて逸蒼の元へは走れなかったのであろう。逸蒼には子どももすべて受け入れて生活をたててゆく経済力はない。新聞や同人誌にこれらの句が載れば、噂にもなっ

たことであろう。夫の耳にも入る。妊娠は彼女をうろたえさせ、苦悩を倍加させたはずである。その煩悶が彼の煩悶となる。

別れて一人海の碧さにをののけり [英太郎句集32]

かもめ、かもめ、死にきれず海に暮るるか [英太郎句集32]

枕に秘めし文読みかへす雨夜なり [英太郎句集39]

こぬ手紙、待つほどに花曇るなり [英太郎句集44]

女性とは会えない日々が続く。不安が募る。やがて女性の方から別れの手紙が来る。

ああ春ゆきぬ、ひとつぼしは砕けしか [英太郎句集45]

風なく落つる病葉になげきの息する [英太郎句集46]

青葉若葉明るみのかざりをとぞす [英太郎句集46]

こひぶみみな焼くほのほよりたつは白ろき鳩 [英太郎句集46]

こひぶみみな焼いて、心のみしかと抱きしむる [英太郎句集47]

奔放な恋の謳歌から一転、世界が閉ざされてしまった絶望感が漂う。同じころの新聞の切り抜き<sup>10</sup>には、

ちつと見詰めし眼を読みもだす悲しさよ

一人となつてトボトボと行く闇かな

悶まざまざ心窩に石のごと重もり行く

狂ひそになる身起こして灯台の灯見入りぬ

夜雨ばらばら 腸<sup>はらわた</sup>千切り千切り消ゆ

八つ裂きにせむ怨をゆるす涙なり

女性への恨み言はない。失った女性への切ない想いが重く心を圧する。声に出して叫べない悲痛さが冷たい雨の刃となる。それでも女性を想う涙は恨みを流してしまう。

いらいらと本とち車窓の雲に君思ふ [英太郎句集58]

はるかベニスの灯よりはるかなるこひびと [英太郎句集67]

逸蒼は3年暮らしたアップランドを去った。それでも想いは残った。

## 『砂漠の旅より』

逸蒼はポートロサンゼルス、アリゾナ州ユマ、ロサンゼルスと移動する。その間1916年11月から1918年5月までの句を集めたのが『砂漠の旅より』である。この句集にも女性への断ち切りがたい想いが詠まれている。

形見の琴爪の銀箔のあえかな花びら [砂漠の旅8]

花咲き花散り魂の烙印くすぶる [砂漠の旅10]

海に砂漠にてびかれ受けし試練の鞭 [砂漠の旅41]

汝と千万里を隔つ思ひの今年の初空 [砂漠の旅42]

花びら落ちし文殻を裂きまどひ [砂漠の旅46]

激しさはもうない。別れたはずであったが未練以上の恋慕の情がある。別れて、忘れるために見知らぬ土地を放浪しても、忘れることはできない。

その後、女性にも逢う機会があったのであろうか、完全に別れたとは思えない句が残っている。

砂にまみれし手を手をにぎるほほえみ [砂漠の旅32]

このまま海に死ぬも悔なき瞳を交はす [砂漠の旅33]

ひそかに会ひしそのかみのベンチの落葉 [砂漠の旅34]

白ら波白ら波久遠の愛をうちやまず [砂漠の旅36]

われらの枕をひたせし水平線ぞまざまざ [砂漠の旅36]

われらの恋を葬りしこの海の青さは [砂漠の旅36]

狂へる波のしぶきに濡れし二人のむかし [砂漠の旅36]

山を品する君が言葉を織りこんで霞 [砂漠の旅47]

日落つる方へ君が自動車ひたいそぐ [砂漠の旅47]

会ふて別れて春の日はうつろに暮る [砂漠の旅47]

恋の追想とは思えない生々しさがある。しかし、当初のような奔放さは感じられない。会っているときは、再び、愛は久遠に感じられるが、その愛に終わりがあることを「二人の今」は知っている。青い海に心中する狂おしさはない。同人として、「元」恋人の俳句の言葉を吟味する余裕さえある。愛は過去の出来事。少なくとも、女性にとっては精算されたものであった。女性は家路へ急ぐ。

一期の別れのテレホーンをしどろに切つて [砂漠の旅50]

ふたたびききえぬその声をいのちに鏝め [砂漠の旅50]

おそらくは女性にかけたのであろうか。逸蒼は、南加を去る決意をする。この後北のサクラメントへ向かう。

青葉若葉の渦巻く中を我が列車 [砂漠の旅51]

新しい出発の輝きが感じられる。

## 『霧笛』

1918年5月から1923年12月までのサクラメントとサンフランシスコの句が収録されているのが『霧笛』である。農園労働の句は力強い。

この烈風に逆らつてホー打つおほ汗 [霧笛33]

北風すさんでホー跳ねかへる荒ら畑打ちゆく [霧笛33]

虹噴きあぐる緑野の涯なき明るさ [霧笛39]

サクラメント平原の広野を鍬で開墾する男の汗が光る。夕立の湯気あがるなかに夏の明るい夕陽、湧き上がる虹。広い空、広い野原、心も晴れ晴れする。

悲劇は突然だった。1920年7月8日、「白昼左脚を跛す」。

果樹の根を掘るシャブルふみつつ倒れし炎天 [霧笛45]

悪性骨髄炎だった。入院・手術もはかばかしくなく、左足の自由を失う。長い闘病生活が始まった。

はるかな灯の灯の珠をつらぬる我が涙 [霧笛51]

窓のガラスに息かけて書く死の字の月光 [霧笛57]

靴音は街灯消して消えゆく靴音 [霧笛60]

今日の陽とこしへに落ち水平一線 [霧笛74]

うらぶれはてて冬雲のつんざけ飛ぶさま [霧笛75]

病者の絶望が感性を研ぎすます。死を思う静寂のなかに、遠くの街の灯りが涙で幾重もの円環となって重なる。眠られず、このまま死ぬのかと思う、ガラス窓に書いた死の字を青白い月光が射る。冷たい夜が明けてくる。街灯を消す人が来る。一つずつ灯が消える。落ちた陽はもう昇らない。働けない労働者はアメリカではうらぶれ果てるしかない。鉛色の雲はちぎれちぎれて流れ去って行く。

失意のどん底にある人が宗教に救いを求めるのは自然である。すでに失恋のころから逸蒼は、キリスト教に傾斜していたように思われる。

砂漠へ影曳き大能の御手に [砂漠の旅1]

鳴るはキャソリックの尖塔の未明の鐘々 [砂漠の旅3]

働き靴の紐しむる早天の鐘さやか [砂漠の旅5]

鳴りやまぬまに懺悔せよとの祈りの鐘 [霧笛24]

鐘の音はあるときは働く気力を与え、あるときは悔恨の想いを新たにする。救世軍の療養所に入ったことは経済的理由からであったろうが、逸蒼にとっては一つの転機となった。

病み臥す窓より丘の入陽の十字架黒ろく [霧笛57]

天津雁ゆく声声の祈りをつらね [霧笛59]

鈍く光る十字架を凝視して死を覚悟したであろう。しかし、献身的に看護する敬虔な祈りの姿に日々接するうちに、飛び行く雁の鳴き声さえも神への生の祈りに重なってくる。

悔改めの涙落つめぐみの座には白百合 [霧笛68]

神をたたへてうらかな光の子となる [霧笛77]

あれ野を行くときもと賛美歌うたひ決るる [霧笛78]

夕焼ややにうすれゆく賛美歌をくちすさむ [霧笛83]

悔悟の涙を流し、「光の子」となる。めぐみを感じ、うらかな気もちの余裕も生まれ、散歩では賛美歌もでる。不自由な体で歩く野からは、自然の厳しさは感じられない。暑くも寒くもないおだやかな初夏の一日。心のやすらぎが感じられる。

枕辺の黒い小型のな聖書の星空 [霧笛85]

焚火の明かりに聖書読むひとりの冬暁 [霧笛85]

焚火くわつと炎え聖書の細字あざやかな [霧笛85]

春しののめを灯ばし読む聖書の一章 [霧笛90]

誰かにもらった聖書なのだろうか。一心に読む。聖書のびっしりとした細字を灯火で読みつづける。突然、光が強くなり、字の方から目に飛び込んでくる。細字が言葉を発する。また聖書を読み続ける。夜明けは近い。

静に祈る朝朝の屋根の霜かがやく [霧笛87]

天にうつつふ鶴を聴くたましひうるみ [霧笛90]

神のめぐみに感謝する祈りの朝、都会のくすんだ屋根さえ銀色に輝く。大空を飛翔する鶴の鳴き声さえ、祈りが天に届いているかのように聞こえる。癒される。

逸蒼が救世軍の療養所で抱いた信仰心を生涯持ち続けたという確証はない。聖書を読んで夜を明かすほどの熱意はその後の『海隔て』には見られない。それでも、

また漂泊の旅へ出づポケットの聖書 [海隔て16]

聖書にちらほら星星ほどはある誤植 [海隔て40]

とあるので、聖書は持ち歩き、折に触れて読んでいたのであろう。後者の句は、校正係となった職業意識の方が先に立っている。

## 『海隔て』

闘病と信仰は逸蒼の句風を変えた。同じ夕陽さえ、発病の前と後とで異なる。

もがきさげびつつひきずられ日は落つる<sup>11</sup>

春の太陽まつかな愛に炎える [霧笛76]

前者は恋に煩悶していたころの句。境遇に抵抗しながらも、社会規範に縛られ、もだえ苦しむ我が身が、カッと燃えながら大地に吸い込まれてしまう太陽と二重写しになっている。ムンクの「叫び」が連想される句である。前者は病後、松葉杖で社会復帰をめざしているころの句。まっかな夕陽は、暖かい。太陽は愛だ。そして松葉杖の我が身を包んでくれている。

逸蒼は当初から生活を活写し、一刻一刻の想いを俳句に託してきた。俳句は一枚の心象画であった。

帰路の夕日は並木の――に我が影を烙き入れたり [下山英太郎句集11]

荒らぶる雲脚を間切り飛ぶ鷹に峰低し [下山英太郎句集15]

最初の句は南加の夏の日差しの強さを詠んでいる。道は幅広く、まっすぐに延びている。強い夕陽を浴びて男は一步ごとに木々に影を投げる。その影は黒々と濃く、長い。頑健な体が造る影だ。並木の一本一本に自分の影を「烙き入れたり」と断定したところに、一日の激しい労働をやり遂げた男の誇りが感じられる。次の句は、雄大な自然を詠んでいる。最高峰に立つと、峰も雲も眼下にある。雲の流れは速い。鷹が雲の行く手を突っ切って飛んで行く。爽快である。

オリーブ林をなだれ落つ黄な冬陽なり [英太郎句集31]

酒場を出て、棒立ちに海の入日見る [英太郎句集51]

血みどろの日輪くだつ音なき濁流 [砂漠の旅2]

ダンスの群衆へ紅の緑のリボンが流るる [砂漠の旅7]

イムペリアル平原の一線沈み夕星捧ぐる [砂漠の旅25]

労働かへのジャムバ振へばとろくる落日 [砂漠の旅44]

絶頂の秋晴に透かしては拭くめがね [霧笛7]

これらの句もイメージは鮮烈である。

霧に埋れて甲斐なく鳴りに鳴る海ぞ [砂漠の旅37]

悩みのたうつ蒼海が全地をかこむか [霧笛9]

悩ましい想いを託した海でさえ、大きい。

自動ピアノはしやぎぬく今宵かぎりの酒場 [霧笛22]

けふも一つぶ一つぶのオリーブ搾り暮れ [霧笛25]

土工ら賭けるレールの中の地べたの銀貨 [霧笛28]

下層労働者の生活も遅しい。一日中働き、酒を飲み、博打を打つ。明日への憂いはない。

闘病は逸蒼の生活の場を狭めた。そのため、日常のありふれた、ちょっとした出来事をとらえた句が多くなった。

ちよんちよん雀が一つ来て松葉杖のとも [霧笛64]

椅子寄せ病者ら一つ窓の冬陽分け [霧笛62]

ほそいほそい電灯の針金炎えて時雨る [霧笛89]

荒磯の目がらへ廻り灯台の灯がくる [霧笛102]

猫はだまって靴直す腕前視てゐる [海隔て49]

逸蒼のまなざしは対象を愛おしんでいる。確かに、

砂に曳くわが影も水平線もさびし [霧笛100]

のら犬に嗅ぎよらる松葉杖つく身の [霧笛107]

のように、境遇を嘆く句もある。と同時に、

しへたげられた木木の芽が吹かずにどうする [霧笛107]

波の底よりよみがへり家路さす漁船 [霧笛84]

たんぼぼ明るく崖下の寒き海しぶく [霧笛86]

まつ黒ろき鬱屈の石炭が噴くほのほ [霧笛87]

のように、どんな厳しい冬でも春が来て芽吹くのだという祈りとも信念ともいえる句もある。漁船が帰るといふありふれた光景も、地平線からではなく、波の底からよみがえる、と詠むところに、再生への希望が読み取れる。鬱屈した命のないような石炭さえ、赤い命を噴き出す。やがて病状も安定し、逸蒼は友人の好意で新聞社の校正係として働けるようになった。

今日から働らくよろこびの風薫るなり [霧笛95]

逸蒼はアメリカで再起をめざした。

## 故郷

発病は帰国する絶好の機会であったかもしれない。逸蒼は10年を限りに帰国するつもりで渡米した。

父の忌の今宵、鳩の音ヒソと胼裂くる [英太郎句集1]

夕星見てあれば故郷の祖母のわびしさが [英太郎句集4]

多くの移民と同様、故郷はなつかしい。しかし句集のなかで望郷の句は少なく、想いも弱い。父の命日に、早世した父を偲ぶのは日本で暮らしていても同じであろう。夕星を見上げて故郷に恋々とするのではなく、祖母のわびしさに想いを及ぼせるだけである。

啄木鳥きつつこの不幸者の胸つつく [霧笛6]

荒ら海のしぶきを浴びて故国をわする [霧笛32]

秋の夜空にひんやりふるさとへつづくか [霧笛80]

送金できないふがいなさを責めているのか、あるいは不倫の果ての放浪生活への嘆きか、故郷の家を思えば、今の境遇はあまりに渡米前の夢とはかけ離れている。胸がうずく。太平洋のしぶき

の冷たさ、痛さを感じて故郷と自分との隔たりを自覚する。「わするる」ということばを使ったことで、故郷を忘れていない想いがかえって強くが伝わってくる。第三の句からは、この夜空が故郷まで続いているのだという、断ち切りがたい想いが感じられる。後者は、病を得て、日本へ帰ろうかと迷う弱気とも受け取れる。しかし逸蒼は帰らなかった。

永劫もどらぬ時計の針の鋭きとがり [霧笛86]

水平一線かぎるままかへらぬふるさと [霧笛114]

無限に切れ目なくつづくような時間。時計の尖った針先は、きっちり一秒を切り刻む。刻まれた時は永遠に戻らない。水平線は大海原と大空を真一文字に切り離す。妥協はない。あの一線を越えてアメリカに来た。ふるさとへは帰らない。

春の満月有明けて褪せゆくおもかげ [霧笛112]

年月とともに、激しかった恋の想い出も褪せてくる。

この大陸に埋ごむべき骨の身としていそしむ [海隔て18]

異国の夜霧に濡れて生き徹うさうとす [海隔て22]

渡つて来たきりの太平洋がある [海隔て131]

恋も昨日も弊履と棄て来て [海隔て135]

海の彼方にふるさと捨て置く [海隔て140]

もう帰らない、冷たい、暗い「異国」で精一杯労働し、骨を埋める。ふるさとはふるさと、過去は過去。時間が戻らないように、太平洋を渡ってきた自分は戻らない。戻れない。望郷ではなく、諦観が感じられる。

春の太陽おかに享け移民らねづよく [霧笛109]

桜んぼ摘み葡萄摘みながれながれ老いゆく [霧笛120]

移民は年老いてきた。自分も年老いた。それでも根強く生きてきた。アメリカを墳墓の地として、体の自由がきかなくても頑張ってきた。

移民の汗で地で肥えたアメリカなんだが [海隔て35]

がたがたフォードに妻子つみ落ちゆく移民よ [海隔て40]

日本移民のゆくところ排斥が待ちかまへてる [海隔て40]

移民によって農地が開墾され、鉄道が敷設され、工場が建てられ、アメリカは発展した。その発展を支えてきた移民を、日本人だという理由だけでアメリカは排斥した。古自動車に家族を乗せて、移民はアメリカの大地を放浪するしかない。墳墓の土地だと定めても、アメリカ社会の一員として受け入れてもらえない。アメリカ社会の入り口でさまよう「亡者」でしかない。それでも人は生きて行かざるを得ない。

除夜の汽笛が鐘が鳴る足洗ふてゐる [海隔て176]

今年も更けゆく。足を洗って、また新しい年が来る。日常の行為を繰り返すことで、自分が今年も生きぬいたことを実感している。『海隔て』はこの句で終わっている。

## おわりにかえて

下山逸蒼は郷里での閉塞的な生活を打破し、十年後には代議士になるといって渡米した。しか

し英語も話せないその日暮らしの労働生活では月々送金するだけで精一杯であったろう。夢の実現のために不可欠な勉強や蓄財は果たせなかった。あきたらない毎日のなかで、逸蒼が求めたのは、俳句を通しての自己表現であった。自由律俳句は、自然の風物や風俗習慣の異なるアメリカでの生活状況を詠むのには適していた。逸蒼は日記に綴るかのように、日々刻々の生活と想いを詠んだ。

日本人移民社会はアメリカにあってアメリカではなく、日本人社会であって日本の社会ではなかった。翁久允は、移民たちを「アメリカの亡者」と表現した。日本社会を飛び出して、アメリカにきたものの、アメリカの主流社会には入って行けない。アメリカでの暮らしは根無し草の暮らしであった。翁久允はそうした移民地の独自性を文学に遺そうとした。アメリカの日本人移民社会を日本語で書く。しかし「亡者」であるがために、アメリカに故郷を創生する物語を書くことができなかった。直原敏平も立身出世の夢を抱いて渡米した。彼は名を残そうとしたが、アメリカを故郷にはできなかった。

下山逸蒼は故郷には帰らないと宣言した。そして自分の想いと日々の暮らしを俳句に詠み込んだ。自分とその周りの小さな世界を詠んだ。その行為は、自己の内面と周囲の事象を写したのであって、外界に働きかける行為ではなかった。死に場所はアメリカではあるが、それが後に続く人々の墳墓の地になる、故郷になるという意識は持たなかった。彼もまた「亡者」であった。

本稿を書き終えてから、下山逸蒼の蔵書と死去する年の日記を見る機会を得た。日記をみると、死の前日まで句を詠んでいる<sup>12</sup>。そして死の直前であろうか、ベットを直すときに脳貧血を起こしたようだと記している。それが絶筆となった。

蔵書には詩集の他に、賀川豊彦の『神との対座』や『福音書に現れたイエスの姿』などのキリスト教関係書がある。文学書ではロシア文学、とくにドフトエスキーが多く、『死の家の記録』、『二重人格』、『悪霊』、『白痴』、そして短編集、トルストイの『罪と罰』もある。さらに社会主義、無政府主義のクロボトキンの『国家論』、エンゲルスの『社会主義の発展』、バクーニンの『神と国家』の存在も注目される。逸蒼は、蔵書の奥付に購入時に詠んだ句や断想を書き込んでいるが、バクーニンの書には、「バクーニン君の霊に告げや——君の所謂不合理な信条を信するクリスチャンは此世に於ても最も合理的な否それ以上に正しい生活をする生活者なのだ君の視、且つ考へた基教者といふのは或る特殊のキャソリック的その者のことであらう恐らく…」と記している<sup>13</sup>。これが何を意味しているのかわからない。逸蒼の句に関して、キリスト教的社会主義、ないし無政府主義の視点からの再考察が必要であろう。この点に関しては稿を改めたい。

\*本稿は「在米日本人『移民地文芸』覚書（1）アメリカの「亡者」——翁久允の長編二部作『悪の日記』と『道なき道』』『白百合女子大学研究紀要』41号（2005年）117-134頁、「在米日本人『移民地文芸』覚書（2）『我が名を』永遠に——自由律俳句と直原敏平」SELLA 35号（2006年）15-26頁に続くものである。

#### 注

1. 野本一平「放浪の日系俳人 下山逸蒼」『かりふゑるにあ往来』（ミリオン書房、1985年）157-174。初出は『歴史と人物』1984年4月号。
2. たとえば、「木曜随想 下山逸蒼の娘」『羅府新報』2000年11月2日。
3. 中郷美美子「日系一世たちの自己表現——下山逸蒼と伊勢田初枝の短詩形文学」、アジア系アメリカ文

- 学研究会編『アジア系アメリカ文学 記憶と創造』(大阪教育図書, 2001年) 325-350。中郷美子「移民地文芸・自由律俳句の世界——下山逸蒼を中心に——」『立命館言語文学研究』7巻1号(1995年) 15-40。
4. 「ウェブもりおか 盛岡の先人たち」「俳人・米国自由律俳句の創始者 下山逸蒼」  
[http://www.city.morioka.iwate.jp/dtl/senjin.nsf/\(\\$BackNumberV\)/0CB977451D52F21A49256E25001A5AF4?OpenDocument](http://www.city.morioka.iwate.jp/dtl/senjin.nsf/($BackNumberV)/0CB977451D52F21A49256E25001A5AF4?OpenDocument) 2006年7月10日閲覧。長尾宇迦『小説・俳人下山逸蒼 業句の海』(読売新聞社 1997年)。
5. 字は異なるが発音は逸蒼に通じる。おそらくこのころは一草と号していたのではないかと、小林は推測する。その他の由来に関する考察に関しては、小林8参照。
6. 在米日本人会事跡保存部『在米日本人史 復刻版(1940)』(PMC出版, 1984年) 692。
7. 未見である。小林によれば、1903年から1913年までの俳句を収録、四六版で、表紙とも38頁。5000句のなかから選ばれた句集であるという。
8. UCLA, JARP コレクション直原敏平文書 Box 86「レモン詩社紙燭会オリブ吟社関係他新聞切り抜き」。
9. 小林36-43。名を久保綱子(1882-1928)という。小林は年上と記したが、中郷によれば実際には年下であった。また小林は彼女の方から誘ったとも見なしているが、確証があるわけではない。久保綱子はアップランドで農業を営んでいた常三の妻で、佐賀県出身、藩医を務めた家柄で、師範学校出身、新聞にコラムを執筆していた。中郷336。
10. 直原文書 Box 86。1917年1月ころ。最後の一句は3月ころの切り抜き。
11. 同上。
12. 「枕辺からさしてきた新春の陽をつかむ」  
「春風となり郡病院の枕べから」  
「新春すくみ暮れゆく病院からでも」  
蔵書や日記は竹村義明氏所蔵の資料によった。
13. 奥付には「一九二九、三、一三サン、フランシスコにて」という記述があって、引用の文章があり、さらに、「一九二九、四、一八 レーン病院にて 第三階より一階の入込み室におろされた日」という記述がある。引用はインクの違いから1929年4月18日に記されたものと考えられる。

#### 引証文献

- 小林不未鳴『下山逸蒼の生涯と其の芸術』(層雲社, 1954年)。  
下山英太郎『下山英太郎句集』(非売品, 1917年)。  
同上 『句集 砂漠の旅より』(非売品, 1922年)。  
同上 『霧笛』(非売品, 1925年)。  
同上 『第五句集 海隔て』(非売品, 1935年)。